

富岡洋子作 「友情なんて知らない」

<前編>

- (効果音) (授業終了チャイム。教室のガヤ)
- クラスメート (口々に)「バイバイ」「じゃあな」「またあしたね」etc.
- 藤原由紀 理恵、じゃわたし、先に部室に行ってるね。
- 浅井理恵 うん分かった。わたしは明日香のクラスに寄っていくから。あ、そうだ、由紀さ、職員室から部室のカギ持ってきてくれる？
- 由紀 オーケー。ほら、理恵、早くしないと明日香待ってるよ。あんたたちの関係ってほんと面白いね。毎日、クラブの前に迎えに行くんだから。ヘンな関係じゃないでしょうね。
- 理恵 やっだー、由紀。何言ってんのよ。もうっ。じゃねー。
- 理恵ナレーション わたし、浅井理恵。青春高校1年の女の子。明日香とは、別にヘンな関係なんかじゃ決まてございません。彼女、中村明日香とは、中学からの友達で、テニス部でもダブルスのペアを組んできた仲間なんです。高校に入ってから、何でも話せていつも一緒にいるから、親友だと思ってます。わたしなんかよりも、テニスの腕はいいんですよ、はい。
- (効果音) (クラブの練習風景。ランニングの掛け声「ファイト！」「はい！」「ファイト！」「はい！」…)
- コーチ (体操の掛け声)1、2、3、4、5、6、7、8。 1、2、3、4、5、6、7、8。ようし、2年生はサーブ練習始め。1年生は素振り100回だ。始め！
- 部員 (口々に)はいー！
- 理恵 1回、2回、3回。(小声で)ねえ明日香、今日のコーチ、いつもとちょっと様子が違うと思わない？
- 中村明日香 うん？ 別に…。そうかなあ。
- 理恵 だってさ、2年生ばっかし見てんじゃん。ひいきだよ、コーチ。
- (効果音) (ホイッスルの音)
- コーチ みんな、集まってくれー！
- 部員 (口々に)はいー！
- コーチ あー、いよいよインターハイも2か月後に迫ってきた。シングルとダブルスとも、何とか予選を通過して、本大会に出ようじゃないか。あー、そのためにだ、スタメンも新しく選ぶつもりでいる。
- 部員 (ざわめき)「えー、ウソー」「ほんと？」etc.
- コーチ これまでのダブルスのペアも組み直していく。2年生も1年生もない。実力でスタメンを勝ち取れ。1か月後にスタメンの選抜試合をする予定だから、みんな、

そのつもりで練習してくれ。よし、じゃ練習に戻ろう。さっきの逆で、2年生は素振り、1年生はサーブの練習だ。よし、始めよう。

部員 (口々に)はーい！

(効果音) (バックでテニス練習の打ち合う球の音)

山内真理子 ねえ明日香。1年生のわたしたちにはすごいチャンスだね。

明日香 うん、わたし、燃えてきちゃう。絶対もらうわ、スタメン。

真理子 明日香なら入れるよ。うまいもん。でもシングルの枠はきついんじゃない？ 2年の先輩たちもいるし。ダブルスならね。

明日香 ダブルス…ね。

理恵 何しゃべってるの？ コーチにどなられるぞ、明日香。

真理子 ああ、理恵。今さ、チャンス到来だって話してたの。

理恵 チャンス？

真理子 そう。Dって、明日香の腕ならスタメンに食い込むのも夢じゃないでしょ。ダブルスでいい相手と組めばねえ、明日香。

明日香 …

理恵 そっかあ、わたしたちにチャンスが来たってことね。明日香とは中学以来のペアだもん。よし、頑張らなくちゃ。

明日香 (かぶせて)別に、いいのよ、頑張らなくても。

理恵 ん？

明日香 ペアは組み直すってこと。

理恵 え？

(効果音) (ホイッスルの音)

コーチ 今日の練習はこれで終わる。あとは…(FO)

(効果音) (理恵帰宅。玄関のドアの開く音)

弟 正 お帰り、姉ちゃん。

父 おう、お帰り。

理恵 あれ、父さん。もうお店閉めたの？

父 ああ。

理恵 どうして？それに母さんは？

正 母さん、ママさんバレーの練習だって。だからケーキ屋さんは早仕舞いにして、父さんがご飯作ってくれたんだよ。ね、父さん？

父 うん。もうすぐ試合なんだってさ、バレーのほうも。ま、エースアタッカーだからな、母さんは。応援してやらなくちゃ。

理恵 ふーん、そう。

正 なんか元気ないね、姉ちゃん。

理恵 うん？ あーあ、母さんはエースアタッカーか。わたしは…、ダメだなあ！ うん

そうだ、父さん。父さんは運動神経いいほうだった？

父 お、何だ急に？ そうだなあ、いいほう…でもなかったかなあ。

理恵 アチャー、そのせいだ。

正 姉ちゃんの運動オンチ。

理恵 あー、言ったなあ！ このお！（一同笑い）

ナレーション 父さんたちの前で明るく振る舞ったものの、わたしの心の中には、あの明日香の言葉が冷たく響いていた。明日香のあの態度は何だろう？

次の日、学校で――。

(効果音) (終業のチャイム)(ガヤ)

理恵 由紀、悪いけど、また部屋のカギ取ってきてくれる？ わたし、明日香のとこ行って来るから。

由紀 オーケー。

明日香 (遠くから)由紀――！

由紀 あれ？ 今日は向こうから来たみたいよ。

明日香 由紀。ちょっと一緒にラリーして打ってほしいんだけど。先に部屋に行こうよ。ね？

由紀 う、うん。でもカギ。それに、理恵が…。

明日香 ハイハイ。カギはあるから。さ、行こ行こ。

理恵 明日香…。

ナレーション 練習が終わった帰り道、わたしは、思い切って明日香に切り出した。

理恵 ちょっと明日香、何のつもりなの？ 急によそよそしくて。ねえ。

明日香 はっきり言うけど、わたし、迷惑なのよね。

理恵 え？

明日香 よそよそしくも何も、わたしは別に理恵の恋人じゃあるまいし、毎日教室まで迎えに来られたり、中学以来の付き合いでどうのこうのって言われるの、わたし、イヤなのよね。

理恵 だって、だってわたしたち、友達じゃない。親友でしょ？ わたし、明日香には何でも話してきた。そのたんび、“友情っていいな”って思ってた…。

明日香 (かぶせて)親友？ 友情？ そんなの知らないわ。イヤなのよね、そういうベタベタしたのって。悪いけど、友だち付き合いをそういう風に誤解しないでほしいわ。じゃ。

理恵 明日香！

ナレーション ショックだった。「友情なんて知らない」だなんて。一体、明日香にとって、わたしって何だったの？ それに、まるで厄介者を見るみたいな目でわたしを見た。ひどい、ひどいよ、明日香…。

(効果音) (テニスの練習風景)

麻莉子 (声を潜めて)え～、そうだったのお？ そうよねえ。理恵とじゃねえ。
明日香 テニスは実力よ。理恵と組んでたらスタメンには入れない。
麻莉子 うーん、ほんと。それに引き換え、由紀ならまずまずだもんね。
明日香 理恵は、わたしと組んでれば大丈夫だと思ってんじゃないの？ 身の程を知らないのよ。(2人笑い)

コーチ こらー！ そこ、何くっちゃべってんだあ！
2人 はーい、すみませーん。
ナレーション 明日香たちの話は、筒抜けだった。どこにもお節介な人はいるもので、わたしに一部始終を話して聞かせてくれた。明日香はわたしをそんな風にしか見ていなかったのか。裏切られた…。そう思うと、悲しいやら、悔しいやら、腹が立ってきた。こうなったら負けていられない。目には目だ。実力には実力。強くなってみ返してやるんだ。
この日から、わたしの自主トレが始まった。毎朝6時からの走り込み、素振り、壁打ちと、必死になって練習した。

正 ファイト、ファイト！ 姉ちゃん、あと20分だよ。父さんも頑張ってるねえ。フレー、フレー、父さん！
父 おお、走るぞ。(ふうふう荒い息)
理恵 ったく。なんなんだよお。なんでわたしの自主トレに2人が参加すんの？
正 みんなでやれば怖くないって。それー！
ナレーション 明るい家族に冷やかされ、いや、囲まれて、明日香とのことを忘れるよう自主トレに打ち込んできたわたしに、もう一つの日課ができた。それは、保健室に入り浸ることだった。

理恵 先生。おなか痛くてえ。寝かせて。
井上先生 あー来た来た。今日は遅いと思ってたところよ。ん？ 今日は出たの？
理恵 あれ？ ううん、まだ。
井上先生 理恵ちゃんのは、ストレスの便秘と下痢なんだから、朝はちゃんと食事を…(F O)

ナレーション この人、保健の井上先生。頼りになる姉貴って感じで、飛鳥とのことも全部話してすっきりしちゃったの。なんでも、若い時からクリスチャンなんだって。
井上先生 理恵ちゃんの“友情を持ちたい”っていう気持ち、とても大切だと思うな。友情を持ち合うには、信じ合うことができなくちゃいけないでしょ。案外それが怖いんじゃないかな、今の子って。本当は、心を通わせて話し合ったり、喜んだり泣いたりしてみたいけど、傷ついたり傷つけたりしてしまいそうで、避けちゃうんじゃないかな、本能的に。

理恵 それって、明日香のこと？
井上先生 うん、そうね。明日香ちゃんもそうかもしれない。

理恵 でも明日香はわたしを裏切った。自分がスタメンに入るために、わたしを捨てたんだもん。勝手だよ。自分のことしか考えてないんだもん。

井上先生 これ、聖書にはね、友情のことも書いてあるんだけどね、(パラパラ聖書をめくる)ほらここ、「ヨナタンは、自分と同じほどに、ダビデを愛した。」だれでも自分はいかっかい。でもこのヨナタンて若者は、自分を愛するのと同じくらい相手のダビデを愛した——、分かる？ 友情は、相手を自分のように愛すること。相手のために一番よいことをしてあげることだって聖書は言ってるの。

理恵 愛する？ 自分と同じほどに？

井上先生 そう。相手を自分のことのように、自分だと思って愛する。

理恵 難しいよ、先生。そんなの、できっこない。

井上先生 できっこない？

理恵 うん。

井上先生 そうね。でも神様にできるわ。神様は必ずしてくださる。信じてやってごらん。「愛する」って言葉は動詞なんだから。行動することよ。神様には不可能はないんだから。信じてやってごらんよ、理恵ちゃん。

理恵 う、うん。

ナレーション なんだか、おっきな手でドンと背中を押されたみたいに。わたしは返事をしてしまった。やってみよう。明日香との友情を、もう一度作り直していこう。

<後編>

(効果音) (目覚まし時計の鳴る音)

理恵 うーん。(目覚ましを止める)朝かぁ。(大きな伸びとあくび)

正 姉ちゃん、起きた？ 行くよ、ジョギング。

理恵 (伸び)何？ 正、お前も行くの？

正 うん。姉ちゃんの朝の自主トレに付き合っただけよ。

父 独りよりもみんなで行ったほうが長続きするからなあ。

理恵 ヤだ、父さんまで？ ったくもう。“明るい家族”なんだからもう。

正 さ、行こうよ。母さん、行ってきます。ファイト、ファイト！

ナレーション わたし、浅井理恵。青春高校 1 年。テニス部に入っているんだけど、1 か月後にインターハイを控えて、自主トレに励んでるわけ。というのも、親友の、そう、わたしは今でもそう思っただけで、中学の時から一緒に、ペアを組んできた友だちの明日香が、このインターハイのスタメンをねらって、力のないわたしを捨てて由紀に急接近しているの。それに、一番つらかったのは、明日香に言われたあの一言——。

明日香 (エコー)親友？ 友情？ そんなの知らないわ。イヤなのよね、そういうベタベタしたのって。

ナレーション 落ち込んでたら、保健室の井上先生、この人はクリスチャンなんだけど、井上先生から教えられたの。聖書に出てる人たちの友情から、相手を、自分を愛するのと同じくらい愛するのが友情だって。「難しいよ」って言ったら、先生は、「神様にはできないことはない。だから、その神様を信じて相手の人を愛していってごらん」って。「神様が愛する力を与えてくださるから」って。

(効果音) (テニスの練習風景)

コーチ 言いか、インターハイに勝つためには、まず自分に勝つことだ。1週間後に出場選手の選抜戦を行う。これはシングル戦だ。

部員 (口々に)「え～、1週間後?」「シングル?」「わたしも選ばれるかな」「ダメ余きつと」etc.

コーチ シングル戦の勝者の中から、スタメンを決めることにする。いいな。

部員 はい。

コーチ じゃ、その組み合わせを発表する。近藤対小林。(生徒返事「はい」)山崎対佐々木。(はい)飯岡対木内。(はい)江幡対神谷。(はい)…

理恵モノローグ どうせわたしなんか、選抜戦にも選んでもらえないだろうな。明日香はだれと対戦するんだろう。

コーチ 鈴木対藤田。(はい)中村対浅井。

明日香 ええ?

理恵 はあ? は、はい!

麻莉子 (小声で)うっそー。どうして理恵なんかが明日香と?

由紀 ほーんと。あ、でもこのところ、理恵は腕を上げてきたかもしれない。

コーチ 何だ、中村? 何かあったか?

明日香 い、いえ。理恵となんて話にならないわよ。

コーチ 見くびるなよ、中村。浅井は案外手ごわいぞ。

理恵 コーチ、そんなことないです。わたし、もったいないです。明日香が不服に思うのも無理ないんです。

明日香 かつこつけないでよ、理恵。あんたにかばってもらうほどヤワじゃないわよ。わたしたちはライバルなんだから。

コーチ そうだ、ライバルだ。勝ったほうをインターハイに出す。じゃ今日の練習はこれで終わる。

部員 ありがとうございます。

麻莉子 ねえ、理恵やったじゃん! 明日香と対決だって? 大丈夫?

理恵 え? うん、そんなの、やってみなきゃ分かんないよ。

明日香 やらなくたって分かるわよ。理恵なんかボレーも下手だし、ポイントが甘いんだから。

理恵 明日香、ありがとう教えてくれて。じゃ、そこに気をつけて練習してみるよ。

明日香 えー？ いい加減にしてよ。どうしてあんたってそう人がいいの？ ベタベタ甘ったるいのは大っ嫌い。自分だけいい子ぶってないでよ！

理恵 あ、明日香！（モノローグ）何よ、せっかく友達やり直そうと思って、気を遣ってんのに。どうしてダメなのよ。もう知らない！ いいわよ。本当にわたしたちライバルになったのね。友達じゃなければ敵なんだ。ようし、負けない。絶対負けない！（多重エコー）

ナレーション そうしてわたしは練習に練習を重ねて、“打倒明日香”を目指した。
5日後のこと――。

（効果音） （教室の戸の開く音）

理恵 井上先生。おはようございます。眠らせてー。

井上先生 ん？ また来た。これで2人目だね。全くテニス部はどんな練習してんのかしら。ちょっと明日香ちゃん、起きて。ほら、お友達が交代で眠りに来たわよ。

明日香 今は友だちじゃありません。ライバルです。

理恵 そうです。ライバルです。

井上先生 甘ったれたこと言ってんじゃないの！ ライバルって言葉、ほれ、辞書で引いてごらん。（ドスンと辞書を置く音）

明日香・理恵 ええ？（パラパラ辞書を引き）“競争相手”…。

井上先生 そう、技を競い合う者同士ってこと。あんたらの、テニスをオモチャにしたケンカごっこ、意地の張り合いだね。さ、出てった出てった。

（効果音） （ドアを開けて追い出す）

明日香・理恵 あ、ああ、ちょっと…。

明日香・理恵 （顔を見合わせ）ふん！

ナレーション すごい剣幕で保健室を追い出されてしまった。あんな先生を見たのは初めてだ。なんか後味悪い。

理恵モノローグ “テニスをオモチャにしたケンカ”か。

ナレーション やけにその言葉が引っかかった。

（効果音） （理恵の帰宅。ドアの開く音）

理恵 ただいま。

正 お帰り、姉ちゃん。ねえねえ、井上先生って知ってる？

理恵 あん？ 何、突然。知ってるよ。学校の先生だよ。

正 そうか、やっぱり。

理恵 なんなの、一体？

正 あのね、実はね、僕さ、教会学校行ってるでしょ。

理恵 ああ。それで？

正 でさ、僕の先生なんだよ、井上先生は。

理恵 はあ？ 正の先生？ 教会学校、教会…。ほんとかよ、正！ へえー、ビック

り。

正 でき、この前の日曜日にさ、先生が僕に「お祈りしよう」って言うんだ。「姉ちゃんがいいテニスの選手になれるように」って。

理恵 いいテニスの選手？

正 うん。先生、一生懸命祈ってたよ。

理恵 わたしのために…。先生が…。

(効果音) (ドアの開く音)

正 あ、姉ちゃん、どこ行くの？

(効果音) (理恵の走る音)

ナレーション すっかり人気のなくなった学校に、わたしは急いだ。

理恵モノローグ あ、電気ついてる。

(効果音) (教員室のドアの開く音)

理恵 先生…。

井上先生 …アーメン。あら、理恵ちゃん。どうしたの、こんな時間に？

理恵 先生、今、お祈りしてたんですか？弟から聞いたんです。先生がわたしのこと、いいテニスの選手になれるように祈ってくれてるって。

井上先生 ん？ ああ、正君ね。そうよ。あなたたちにいいプレーをして欲しい、スポーツの名に恥じないさわやかなテニスをしてほしいの、わたし。

理恵 先生、テニスしてたんですか？

井上先生 実はそうなんだ。それと、あなたたちみたいなケンカもしたことあるの、昔。

理恵 ええ、先生も？

井上先生 うん。わたしも中学時代からテニスしてたの。試合に出たくて、勝ちたくてね。そりゃ一生懸命練習したわ。内心、「あの人には負けられない」って思って、その人が失敗すると安心したりして。で、高校2年の時だったかな、マネージャーの人がね、ある時話してくれたの。その人は最初プレーヤーだったんだけど、生まれつき心臓が悪くて、とうとうプレーできなくなったのね。でもその人は、どうしてもテニスから離れられなくて、“自分でできないんなら見る側に回ろう”って思ったんですって。体を動かさずに見てるだけっていうのもきつとつらいでしょうにね。いくらテニスが好きだからって。わたし、その話を聞いてから、”ああ、わたしはなんて汚いテニスをしていたんだらう。わたしのテニスは、純粋にテニスを愛していたからじゃなくて、自分の満足のためだった”って気づかされたの。

理恵 汚いテニス…。自分の満足のためのテニス…。

井上先生 わたしも正君みたいに教会学校に行っててね。聖書から、汚い心、罪っていうんだけど、その罪のこと聞いてたんだけど、その時、初めて、”あ、これが”ってピンと来たの。まるっきしの自分中心。自分勝手。自己満足のために相手を蹴

落とそうとする怖い心。——そしたら、”ああ、わたしも罪びとなんだ。神様に心をきれいにしてもらわなくちゃいけない人間なんだ”って分かったの。聖書にこんな言葉があるのよ。(聖書をめくる音)「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」

- 理恵 罪のためにキリストが死んで、それが神の愛？
- 井上先生 そう。わたしたちの罪をきれいにしてくださるために、神様は十字架の上で、ただ一人の愛するみ子イエス・キリストに、その罪を全部身代わりに背負わせてくださったのよ。(FO)
- ナレーション 正直、耳の痛いことだらけだった。先生の話、神様の話は2回目だったけど、大きな神様の手がなんだかあったかく感じられるのはどうしてだろ。
- 井上先生 ねえ、理恵ちゃん。テニス好き？
- 理恵 うん。明日香とのことがあってムキになってたけど、やってるうちに楽しくなったから。
- 井上先生 そう。じゃ明日香ちゃんは？
- 理恵 …うん。いろいろあったけど、始めっから好きだよ。先生が言ったとおり、意地を張ってたんだ。前に、「神様に任せて、明日香に愛を示してごらん」って言われたでしょ？ 不思議にね、やれたの。でも通じなかったみたい。(涙声で)嫌いだって。やっぱり明日香は、クールに生きたいのかな。わたしの友情は必要ないのかな。
- 明日香 そうでもないよ。
- 理恵 明日香！ どうしてここに？
- 明日香 ごめんね、理恵。理恵の気持ち踏みにじってばかりいて。わたし、自分のことしか考えてなかった。理恵はお人よしだけど、あったかいよ。わたしにはないものたくさん持ってて。わたし、怖かったんだ。そんな理恵が近くにいると壊しちゃういそうで。
- 理恵 明日香…。
- 井上先生 よく自分の気持ちを言えたね、明日香ちゃん。偉いよ。人はやっぱり友だちが必要なんだよ。うれしいとき、つらいとき、それを分け合い、支え合っていく友達が。みんな、ちょっと素直になれば、そして愛があればすてきな友情が育っていくんだよね。2人にもう一つだけ聖書の言葉、プレゼントしようか。(聖書をめくる音)はい、これ。「友はどんなときにも愛するものだ。兄弟は苦しみを分け合うために生まれる。」
- 理恵 「友は、どんなときにも愛する」か…。
- (音楽)
- (ブリッジ。場面転換)
- ナレーション それから2日後、いよいよスタメンの選抜戦が行われた。わたしの相手は親友

の明日香。
コーチ 中村対浅井。3セットマッチ。プレー！
理恵・明日香 お願いします。
(効果音) (ラリーの音)
ナレーション 試合が始まった。なぜか、とても楽しくてうれしい。明日香が褒めてくれた。また以前の親友になってくれた。白いボールを追いながら、返しながら、まるで2人の“心のキャッチボール”をしているみたい。神様の大きな愛に囲まれて、わたしたちは今、本当のライバルしてる！
(音楽) (エンドミュージック、高まって)

<完>